

数種のカミキリムシ

幼虫と蛹の形態と生態

郷 遠

Descriptions and bionomics of some Cerambycid larva and pupa

By Tooshi GOH

(Received and Accepted Oct. 12, 1978)

5, Minamiyamabushi-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162

本文では、以前観察したものを含め、ハナカミキリ亜科2種と、フトカミキリ亜科3種の幼虫および蛹の形態と、生態の一部を記録する。アラメハナカミキリ *Sachalinobia koltzei* HEYDEN は、従来本州では少ない種で、ここ数年、奥日光、富士山で多く採集されるようになった。幼生期は *Rhagium* に似ているのではないかと考えられていた種である。スバタマハナカミキリ *Judolidia bangi* (PIC) は、樹林帯の日陰を低く飛ぶ成虫が観察され、幼生期は、あるいは土中の腐朽材などで過すのではないかとされていた種である。ヨツボシシロオビゴマフカミキリ *Mesosa mediofasciata* BREUNING は、高尾山のモミより散発的に採集され、近年岡山のアカマツ林内で、かなりまとまって採集された例のある種である。キリシマゴマフカミキリ *Mesosa cribrata kirishimana* MATSUSHITA は、原亜種の、フタスジゴマフカミキリ *M. cribrata* がクルミ材などの闊葉樹に寄生するのに反し、本亜種は、アカマツ、クロマツを Host としている点興味がある。足立一夫氏の御厚意で、対馬産の本種の観察をすることができた。エゾトゲムネカミキリ *Oplisia fennica suvorovi* PIC の食樹については、最近高桑正敏氏の報告がある。幼虫の形態は特異的である。材料の提供を賜った、足立一夫氏、およびアラメハナに関し、情報を賜った、鈴木和利氏に感謝する。

1. アラメハナカミキリ

Sachalinobia koltzei HEYDEN

(幼虫の形態)

幼虫はいくぶん扁平で乳白色。頭部一頭蓋は淡橙色でハート形。前額縫合線は白色に走り、他に前額部の正中線左右に平行の白く抜けた帯が走り、その白帯の中程よ

りさらに左右外上方に向って、やや不明瞭な白帯が走る。頬剛毛は太く、多く、前額部にも疎に剛毛が分布し、正中線は下部 $\frac{2}{3}$ が明瞭。前額前縁は黒褐色で、中央に2本の刺毛と、左右に2本ずつの口上剛毛がある。触角は基節内に収縮する。額片は半透明で、基部 $\frac{1}{2}$ は褐色で、上辺は左右が凹んで、中央部は突出する。上唇は褐色でハート形。大腿は、咬合部の上半分は両刃状に隆起し、その両面は微細な縦条状。咬合部下半分は前方に突出し、内側には三条の縦条が走る。大腿外面は滑らかで光沢あり、中央部は横じわを伴ったサメ肌状。基部近くに7本の刺毛縦列するが、その中の何本かを欠損している個体が多い。単眼は3個。縦長の透明隆起の内に3個の黒色素が並ぶ。なお、その外側にも2個の黒色素の沈着がある。これは、あるいは退化した単眼かも知れない。下あご節、あご節は白色。あご節は基部左右に2本ずつ微毛あり、その下部左右には褐色紋あり。あご節は丸く、上部はくびれ、下唇ひげに続き、下唇ひげは、いずれも褐色で第2節は球状。ちょうこう節の基部に褐色紋あり、刺毛横列する。小あご担ひげ節には、太い刺毛が横列し、この部より葉節にかけ褐色紋あり、葉節は円柱状で先まで余り太さは変わらない。小腿ひげは各節基部 $\frac{2}{3}$ が褐色。

胸部一前胸背は、前縁に沿い、いくぶん淡褐色で、刺毛が前縁に沿い横列する。前胸背板の前方は横ジワ状で、中央より後方は不規則なシワ状で、疎に、微刺毛が分布する。前胸側線の外側はシワなく、淡褐色で刺毛有り。正中線は中央より後方にかけ明瞭。前胸腹面において、前腹板、真腹板、上側板は判然とし、いずれも刺毛を備え、真腹板にはきわめて微細な黄色の絨毛が密生する。脚は4節よりなり、刺毛は、基節の周囲、および転

節の内側に2~4本、腿節の先端近くの周囲に10本前後、脛付節の先端近くの外側に2本、小爪の内側に1本と分布する。小爪は針状に徐々に細まり、ほとんど真直で、先端半分は濃褐色。

腹部一中、後胸節より各腹節の側面には、濃褐色の刺毛が多く分布し、1~7腹部の歩行隆起上には、各二本の深い横条が走り、左右の縦条に合わり、条痕に沿い、いくらかの不規則な果粒状突起が認められる。第9腹節の先端は丸くのび、刺毛多く、先端に小さい濃褐色の尾刺が1本認められ、この尾刺は、横から見て、体軸に垂平に伸びる。側板は発達し、刺毛多く、側板隆起上には4~8本の刺毛あり。腹面の歩行隆起上には、中、後胸節より7腹節にかけて、横条が一本走り、その周囲を、背面のものより明瞭な果粒状突起が囲む。中胸気門は縦長で大きく、第1腹節気門との縦径比は約2:1。第1腹節気門と2~8腹節気門の縦径比は約5:3。気門はいずれも淡黄色。第9腹節腹面および肛門部には刺毛多く、肛門3裂。

本種の幼虫は、Lepturinaeの中で、尾刺を有し、前胸背板のしわの状態、特異な額片、背腹両面の歩行隆起上の条痕と、果粒状突起の工合などで、他の種と区別できる。

検体一作図および記載に用いた個体は、1977年7月24日・裏富士、富士林道より採集し、飼育中のもので、体長22.5mm、前胸幅6.6mmのもの。他に多くの個体を比較した。

(蛹の形態)

蛹は側面より見て前かがみで、体節は腹面に向かって彎曲する。背面より頭部は見えない。

頭部一頭頂は正中部左右横シワ状で、眼の上方は左右2山状に隆起し、隆起部上縁に沿い、5~6本の微毛が横列する。額部は凹み、横シワ状で、3~4の微毛が縦列し、触角は低く位置し、眼の中央内側に付着し、基部に2~3本の微毛あり。顔面中央部は強く凹み、横シワが走り、頭楯部で隆起し、また一段落し、上唇は中央凹む。大腿側面には、3~4本の微毛あり、小あごひげには毛はない。触角は、中肢脛節より内転し、♂では中肢脛節端上、♀では中肢脛節端より $\frac{1}{2}$ 位の点で止る。

胸部一前胸部は、長さより幅広く、横しわが走り、その前、後縁に近く横に隆起し、その上にトゲ状突起を伴った茶褐色の剛毛列が左右に連なり、また、中央部にも、やや疎に剛毛が横列し、その中央部と、後部の剛毛列の中程にも剛毛が疎生する。前胸背両側はフチ取られて、後半部は横に突出し、トゲ状突起を伴った7~8本の剛毛が分布する。

中胸小楯板は、上方正中部に小さい疣状突起が1つあ

り、中程左右に5~6本の微毛がある。後胸小楯板は横シワ状で、正中溝広く、溝の下方近くは、不明瞭に疣状に隆起し、また、小楯板の下方より $\frac{1}{2}$ の左右は隆起し、剛毛が密生する。各肢の腿節端上方には、5~10本の剛毛が並び、後肢のものが一番毛の数が多い。各かぎ爪上には一本の剛毛あり。さやばね端は斜め截断状。

腹部一背面第1~2腹節の左右には7~8本の剛毛が横列し、第3腹節より痕跡的となり、第7腹節にやや多くなり、第8、9腹節端には密生し、♂の尾端節(9A)中央には、微小な一対の茶褐色の痕跡的な尾刺(長さ一例で0.13mm)が、お互に寄りそって生えている。♀では不明瞭。肋膜部は隆起浅く、腹面各腹節と共に2~3本の微毛が疎生する。♀の性徴を表わす第9腹節の一対の球状突起は明瞭で2山状。本種の蛹は体の彎曲状態、各部の剛毛列の分布、低い触角の付着工合、微細な一対の尾刺などで他の種と区別できる。

検体一山梨県裏富士、富士林道より51年9月26日、幼虫採集し、飼育、♂=終令時21mm、52年6月13日蛹化、同23日固定。体長12.9mm、前胸幅3.3mm、最大体幅(4A)4.5mm。♀=終令27mm、1977年6月6日蛹化発見。体長16.5mm、前胸幅5.5mm、で同年6月20日羽化。

(生態)

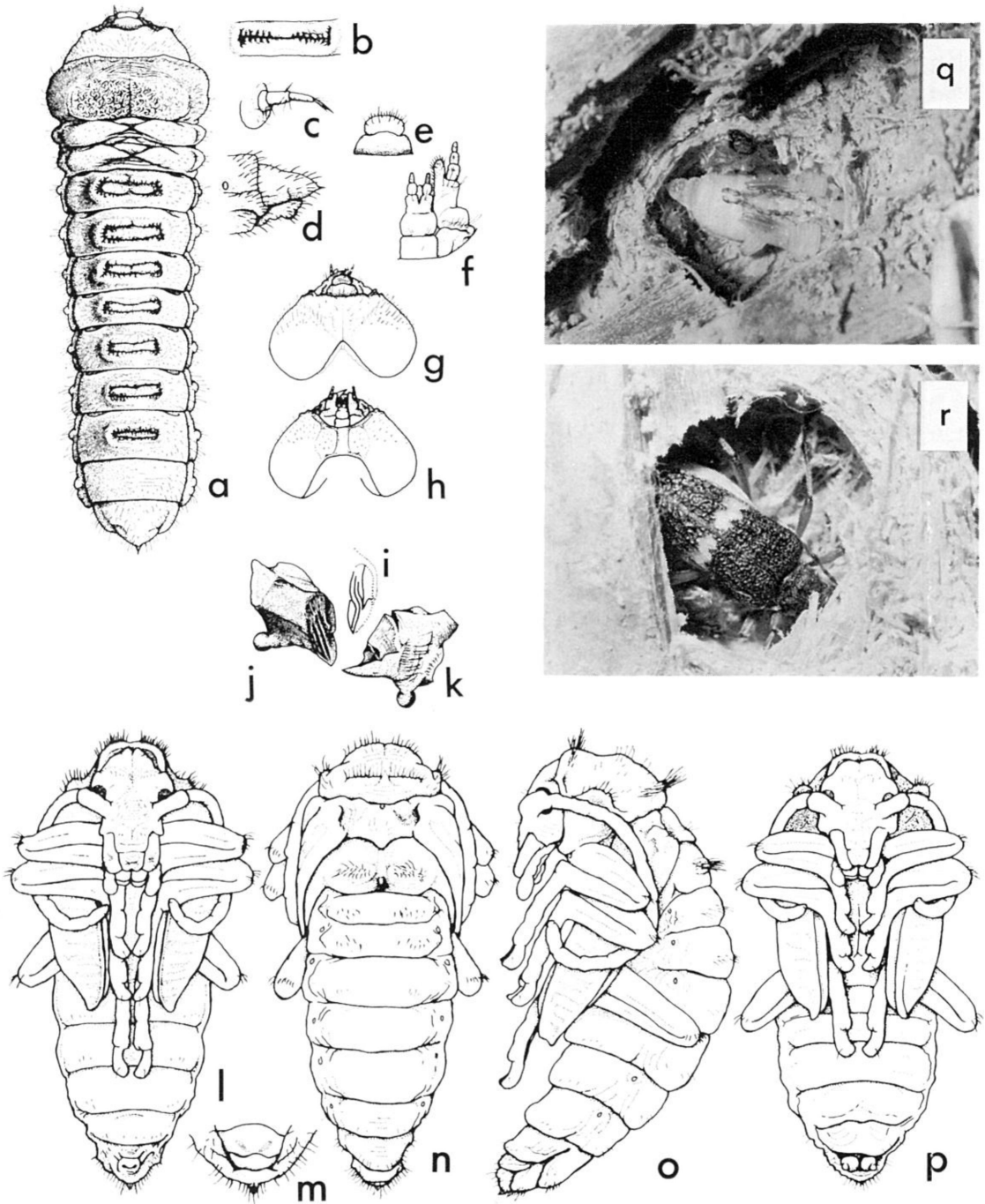
本種の幼虫、および蛹は、富士林道の標高約1,500m付近一帯のコメツガ立枯木の辺材中より多く観察された。多くの場合、幼虫は、コメツガ立枯木の地表より1m前後上方の、辺材の木目に沿って食入しており、蛹室は、木目の間に作られ、*Rhagium* や *Pidonia* の所見と同じく、粗な木の繊維を円形に囲ったものの中で蛹化し、一例では、体長14mmの♂蛹で、蛹室内径15mmの正円形。蛹化の時期は、屋内観察では、6~11月にわたり、野外では、1976年8月29日、羽化したての成虫を一匹割り出し、また、1977年7月24日材中より2♂♂1♀採集し、その中の1♂は、同年7月26日羽化した。これらの資料より考察すると、本種は、夏より秋にかけ蛹化、羽化して、材中で成虫越冬するものと考えられる。成虫は、羽化したては淡色で、ほとんど白色だが、鞘翅は1日で着色してくる。しかし腹部まで完全に着色するには、♀の一例では12日かかった。

2. 又バタマハナカミキリ

Judolia bangi (Pic)

(幼虫の形態)

通常の *Leptura* type で、全体淡黄色。頭部一ハート形で、頭蓋は淡褐色。前額前縁は黒くふちどられ、中央に2本、左右に2本ずつの口上剛毛あり、前額正中線



1. アラメハナカミキリ *Sachalinobia koltzei* HEYDEN

a~k: 幼虫 a. 背面 b. 第1腹節腹面 c. 脚 d. 尾刺 e. 上唇と額片 f. 口器 g. 頭部背面
 h. 頭部腹面 i. 大腿咬合面の隆条模式図 j. 大腿内面 k. 大腿外面 l~p: 蛹 l. 腹面(♂) m. 尾
 刺(♂) n. 背面(♂) o. 側面(♂) p. 腹面(♀) q. 蛹室中の蛹(♀) r. 蛹室中の成虫(♀)

前者には、オオマルクビヒラタカミキリ *Asemium striatum* (LINNÉ) の幼虫が多く、後者には、フタスジハナカミキリ *Nakanea vicaria* (BATES) が多く寄生して、本種の幼虫は、これらに混在していた。本種の蛹化は、屋内では、早いものは3月23日に観察し、また、野外では6月11日蛹化中のものを採集し、6月18日羽化した。本種は羽化間近になると、アオバホソハナカミキリ *Strangalomorpha tenuis* SOLSKY などと同じく、前胸部が橙色となり、羽化が始まる頃には、次第に黒くなって行く。作図に使用したものは、3月23日に蛹化して4月18日に羽化したので、この1例に関しては蛹期間は26日であった。

3. ヨツボシシロオビゴマフカミキリ

Mesosa mediofasciata BREUNING

(幼虫の形態)

ゴマフカミキリ *Mesosa myops* の幼虫に酷似する。

頭部一タテ長の長円形、頭部背面において前額部は淡黄褐色で、前縁は濃い。前縁に沿い中程に2本の刺毛と、左右に口上剛毛2本ずつあり。前額前縁後方には、左右に縦状の凹みが4つ並び、各々刺毛を伴い、内より3つ目の凹みの後方にも1本の刺毛あり。正中線は下部明瞭。前額縫合線は波状で、頭蓋の側面は、上部はやや淡褐色で頬剛毛が5~6本分布する。頭蓋側面は、ほぼ平行に下行し、下部はくびれる。単眼は1個でわずかに縦長。頭部腹面の頭蓋の上半分は茶褐色で、ノドの部は白線状。下口節は下より約1/2の部が横に隆起し、その左右端はコブ状で濃色。ノドの左右に一对の刺毛あり、また、下口節の外側に沿い2本の刺毛あり。頭蓋前縁の円錐突起はとがり、濃色。何頭孔はいくぶんタテ長の円形。下しんひげ第1節と2節の長さは、約3:2。共に先端を1/2残して茶褐色。下しんひげ節は、外側に茶褐色紋あり、内側に多くの微毛あり。あごは丸く、基部に一对と、中程左右に2~3の微毛横列する。小あご節片の部には、一本の刺毛あり。ちょうこう節の下半分は褐色で、刺毛が横列する。小あご担ひげ節は基部が淡褐色で滑らか。上方に刺毛がとり巻く。小あごひげは三節ともほぼ同長で、各基部は茶褐色。葉節は基部より1/2が淡褐色で滑らか。大腿内面の咬合部はえぐれて、先端より二条の隆起が斜めに走り、その隆条の基部は三角状につき出る。大腿外面は平滑で、中程に横シワが走り、基部近くの側面に2本の刺毛あり。

胸部一前胸背前縁は白く抜け、その後方は淡褐色で次第にぼける。前縁の左右に剛毛が横列し、また、前胸側縁に沿い剛毛が生える。前翼状区は中程が外方につき出る。前胸背板は、中程に間をおいて三本の刺毛が横列

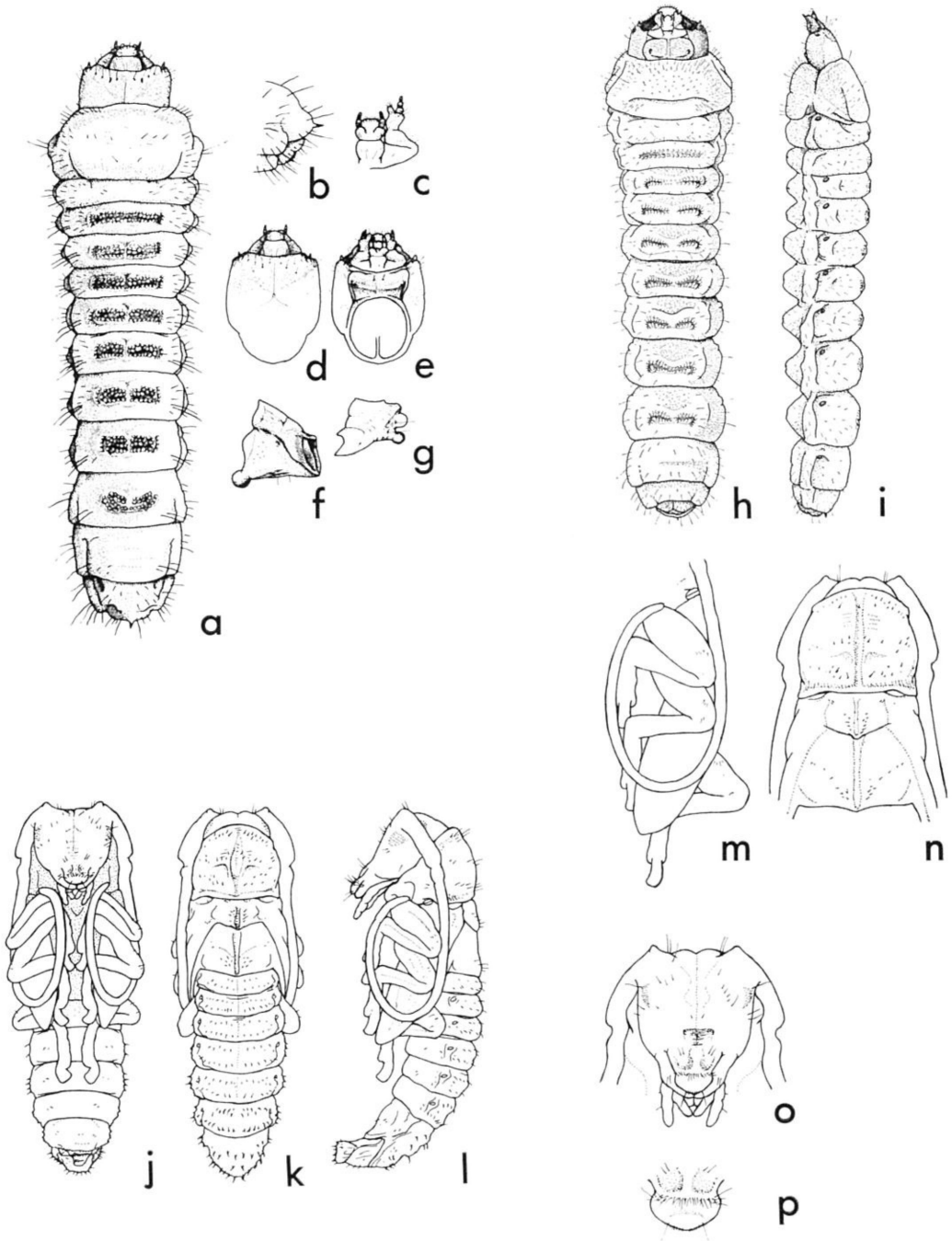
し、やや横シワ状で、後縁は縦シワ状。後胸背上には、不規則な、ほぼ二列状の果粒が輪状に並び、その間に不規則に果粒をはさむ。前腹板は前縁に刺毛多く、前縁左右に小さく淡褐色紋あり。真腹板左右にも刺毛多い。気門は淡黄色長円形で、中胸気門と、第一腹節気門の長径比は約8:5。

腹部第一~7腹節の歩行隆起上に果粒が分布し、この果粒は、底辺の横列した果粒の上が条溝状となり、その上にほぼ列状の不規則な果粒が横列し、これらの果粒は、左右の果粒を伴った縦の条溝でさえぎられる。各腹節の側板盤状部は1~8腹節に認められ、後方に行くに従い大きく、各々一本の長い刺毛を伴う。第9腹節の先端には、体軸にはほぼ垂平な、1本の微細な尾刺があり、その先が茶褐色。腹部腹面の歩行隆起上の果粒は二列の輪状。脚は認めない。肛門三裂。本種の幼虫は、ゴマフカミキリの幼虫とほとんど区別できないが、比較個体(2exs)においては、頭部下面の円錐突起はゴマフカミキリの方が大きく、下口節上の隆起は、一番外側の縦の茶褐色の隆起は、ゴマフカミキリの方がより高く大きく濃色で、ゴマフカミキリでは図示の如く、外方のコブ状突起と内方のヨコ状の隆起の二部分が隆起し著明なのに反し、本種では、一様に山稜状を呈し、かつ、ノドの部までこの隆起が続いている傾向がある。

また、大腿咬合面の条痕は、本種は二条走るが、ゴマフカミキリでは、一本ないしは下方の条隆が基部の一部丈にとどまる。その他に終令の大きさは概して本種の方が小さく、また、Hostにおいても、ゴマフカミキリの針葉樹例があるが、本属において、主にモミに多い種は、むしろカタシロゴマフカミキリ *Mesosa hirsuta* などの点により、かろうじて区別できると思われるが、なにぶん比較材料が少ないことや、下口節の隆起にしても、この類では、かなりの変化があることを考えておく必要があると思われる。

(検体) 1973年3月18日高尾山モミ伐採木より採集した幼虫2匹で、図示したものは、体長10.9mm、前胸幅3.1mmのもので、もう1匹の体長22mmの個体は、蛹化、羽化させた。

(蛹の形態) 頭頂は二山状にもり上り、正中溝は顔面中程まで達し、その下部は横シワ状。触角基部上方にコブ状の隆起あり、それより内側後方に2本ずつの剛毛がある。顔面は中央下半分以外は平滑でほとんどシワがなく、両眼の内側にかけ4~5本、下方にかけ2~3本の剛毛が分布する。眼の上にも上外方に一本ずつの剛毛がある。顔面正中線中程にかけ左右に小さい剛毛が一对ある。大腿中程に2本ずつの毛あり、上唇の基部は凹み、中央が縦に隆起し、その上方左右に2本ずつの毛が生



3. ヨツボシシロオビゴマフカミキリ *Mesosa mediofasciata* BREUNING

a~i: 幼虫 a. 背面 b. 尾刺 c. 口器 d. 頭部背面 e. 頭部腹面 f. 大腿内面 g. 大腿外面
 h. 腹面 i. 側面 j~p: 蛹(♂) j. 腹面 k. 背面 l. 側面 m. 各腿節の剛毛分布 n. 各胸部の棘
 状突起の分布 o. 顔面剛毛の分布 p. 上唇剛毛の分布

え、上唇はもり上り、元の方には剛毛列があり、先端部左右に一对の毛と、その間に微細な短毛が10本前後密生する。小あごひげは、中程外側に1本ずつの微細な黄色毛と、さらに元近く外側に、ごく微細な褐色の短毛が一本ずつある。前胸背は幅の方がわずかに長く(8:7)、正中溝明らか。上方半分は正中溝の左右に横シワが走り、後方には不明瞭な縦状のシワが走り、後部左右に軽い凹みがある。前胸前縁は多少上反し、左右に毛を伴ったトゲ状突起がまばらに7~10本分布し、中程にも同様に並び、後縁はふち取られ、その上方にトゲ状突起が各々5~7本ある。中胸小楯板は正中溝明らかで、その両側下方より中程にかけ、V字形に6~7の小さいトゲ状突起が並び、左上上方にも2~3の微毛がある。後胸小楯板溝は明らかで、その両側下方よりV字形に疎に7~10位のトゲ状突起あり、上方に行くに従い小さくなる。

後肢節は、腹節とほぼ平行で、第3腹節後縁にほぼ位置し、爪先は第6腹節上に位置する。各肢爪に剛毛はない。各腿節端近くの剛毛分布は疎で、微細なものが4~10位(各先端より $\frac{1}{4}$ 位の所に、前肢で5~6、中、後肢で3~4本と、その他に関節上に1~2本)ある。触角は6で中腿節後方より内転し、さやばねの先端 $\frac{1}{2}$ 位の所をよこ切り、各跗節に沿い上行し、先端は外転して、前肢腿節の基部で止る。さやばねの先端は、やや尖り気味に丸まり、第4腹節端に位する。各腹節背面には、トゲ状突起がほぼ2列状に分布し、下の節に行くに従い太くなる。第5腹節後列中央の左右2本ずつと、第6腹節後列の中央左右の4本ずつのトゲ状突起は上方に向って生える。第7腹節以下のトゲ状突起は不規則で大きい。肋膜上のトゲ状突起は、下に行くに従い太くなり、第2~4腹節のものでは小さく2~3本、第5~6腹節では4本前後、第7腹節では2~3本ある。第9腹節端には太いトゲ状突起がとり巻く。腹部腹面では、第4~6腹節には左右に2本ずつの微毛が並ぶ。

本種の蛹は、ゴマフカミキリの蛹と酷似し、一検体丈では今の処両種の蛹を区別できる特徴は見出せない。頭楯部のもり上り工合はゴマフカミキリの方が大で、上唇先端の刺毛列は、ゴマフカミキリの方が長毛で、本種のもは微毛で左右に一本ずつの長毛がある。また、検体の第5腹節上の上方を向いているトゲ状突起は2本ずつであり、ゴマフカミキリでは、多くは第5~6腹節のものとも4~5本ある点異なるが、一個体では変化の幅が不明。

(検体) 1973年3月18日幼虫採集、終令時の体長は22mm、6月20日蛹化した生体を用いた。体長12.5mm、前胸幅2.8mm、前胸長2.4mm。

(生態)

Host はモミ。伐採後2年位経た径30cm位の樹皮のしっかりしたモミの辺材部に2匹共食入していた。1973年3月18日高尾山で採集された幼虫の中、大きい体長22mmの幼虫は、同年6月20日に蛹化し、7月5日に羽化(♂)した。羽化前2日になると、蛹皮を通して、前胸背の斑紋が現れてくる。この4つの黒紋は、羽化前日になると、周囲がオレンジ色になってくる。終令幼虫=22mm、前蛹=15mm、蛹=12.5mm、羽化した後の成虫=11.5mm、腹部白色で伸びているが、24時間以内に縮み、腹部も着色してきて、体長は10.9mmと縮まった。

4. キリシマゴマフカミキリ

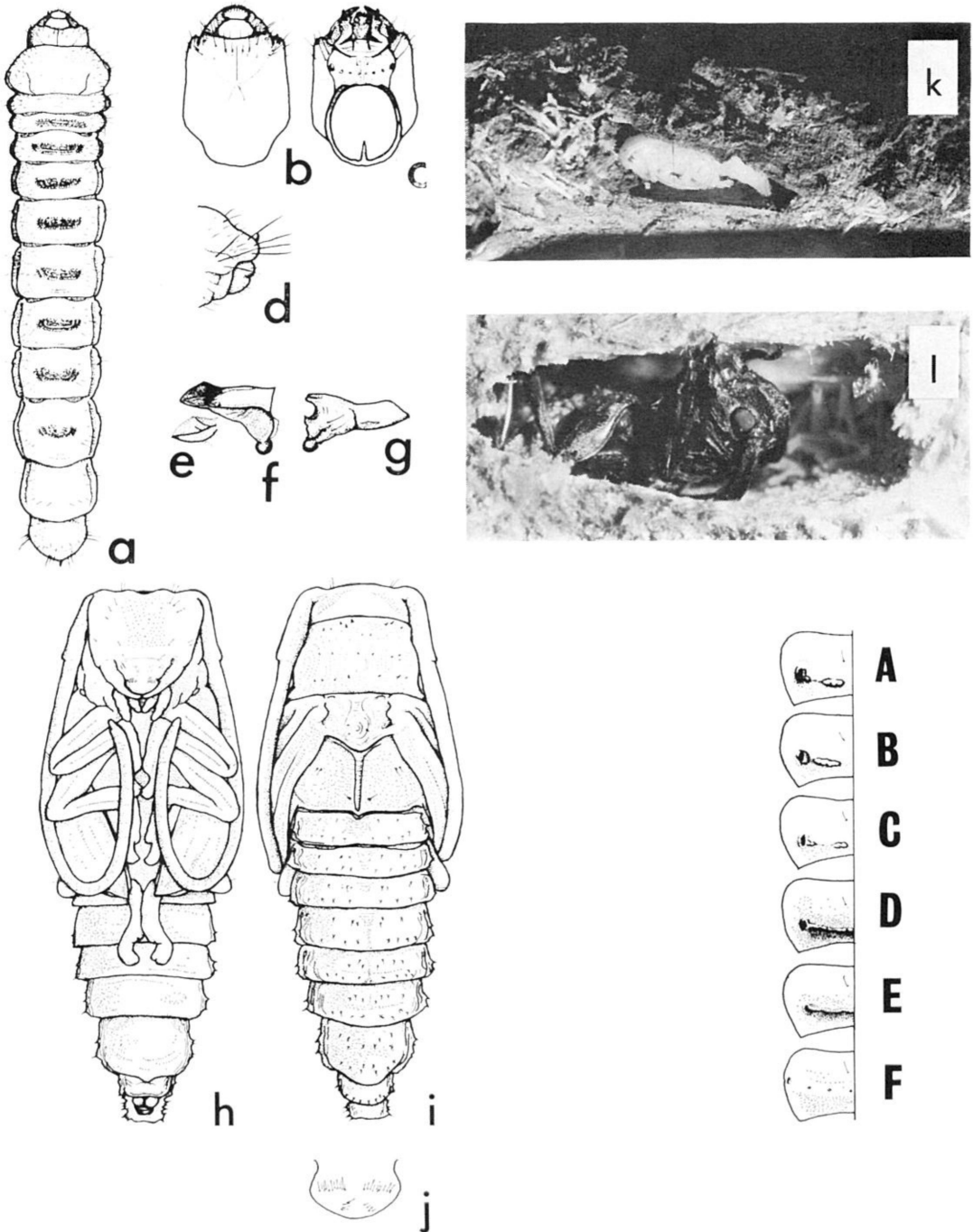
Mesosa cribrata kirishimana

MATSUSHITA

(幼虫の形態)

一般的にゴマフカミキリ *M. myops* や、ヨツボシシロオビゴマフカミキリ *M. mediofasciata* によく似るが、やや細形。

頭部一縦長の長円形で、頭蓋側面は、頬の部の下で軽くしぼられ、中程でふくれ、下 $\frac{1}{4}$ の部は強くしぼられ、幅が狭くなる。前額部は正中線は前縁近くは不明瞭。前額前縁正中中部左右に1本ずつと、左右に2本ずつの口上剛毛あり、前縁近くの後方には、左右に縦状の溝が2本ずつ走り、各々一本ずつの剛毛が生え、その外側にも2本ずつの剛毛が横に並び、これらの4本の毛の下部にも、1本ずつの刺毛がある。前額縫合線は明らかで、その上方内側に2本ずつの刺毛が並ぶ。頬剛毛は4~5本。上唇、額片は、いずれも淡黄色で、上唇基部の側面は褐色。頭部腹面では、単眼は1個で、やや長円形。下しんひげは円筒形で、2節共褐色。下しん生ひげ節は各々基部褐色。あご節基部左右に微毛1本ずつあり。小あご節片より、下あご節にかけ、微毛が疎に横列する。小あご担ひげ節、ちょうこう節の基部は褐色、小あごひげは1、2節はやや球形。葉節基部は褐色で小さく、先端丸い柱状。ノドは白線状。下口節の中程には、小さく粟粒状の突起が左右4個ずつ横列し、ノドに接しているものは微小で痕跡的で、外側のものが一番大きく、やや縦長。これらの突起の前に、ノドをはさんで一对の刺毛あり。また、下口節縫合線上部の外側に、2本ずつの太く長い刺毛がある。下口節前縁左右は隆起し褐色で、正中中部は平坦。大脛は長く扁平。外側は前半平滑で、中程に一段落あり、それより先方側面には、横に長くくぼみがある。段落より基部に向い、縦じわが走り、2本の刺毛あり。大脛内側先端は、斜めにえぐれ、一隆条あり。また、先端の背面角と腹面角より基部に向う線も、それ



4. キリシマゴマフカミキリ *Mesosa cribrata kirishimana* MATSUSHITA

a～g：幼虫 a. 背面 b. 頭部背面 c. 頭部腹面 d. 尾刺 e. 大腿内面先端の隆条 f. 大腿内面
g. 大腿外面 h～j：蛹 h. 腹面 i. 背面 j. 上唇上の刺毛列 k. 蛹室中の蛹 l. 蛹室中の成虫
〔*Mesosa* 3種の幼虫：下口節の突起の比較〕 A～C. ゴマフカミキリ D～E. ヨツボシシロオビゴマフ
カミキリ F. キリシマゴマフカミキリ

ぞれ隆条状で、背面角よりの隆条の下に、それと平行して小さく細い隆条が走る。

胸部—前胸背部は横長で、前縁に沿って淡褐色。側面には刺毛多く、前胸背板上には殆ど毛なく平滑で、後方縦しわ状。前胸側線は明らか。前胸腹面では、前方左右は淡褐色で、前縁に沿って剛毛密生し、前腹板、真腹板の境は不明瞭で横しわ状。小腹板との境は一線状に横しわが走る。中胸節背面には、一線状に痕跡的な果粒列が一本横に走り、後胸節のものは、2列環状の果粒列で、横長の1つの果粒を中央にはさむ。中、後胸節の腹面の歩行隆起上には二列状の果粒列が走り、中胸のものは痕跡的。各背面の腹節では第1～第7腹節にかけては、一本の横みぞが走り、このみぞは左右で上行し、このみぞの下部に一の果粒が並び、上方には、正中部を除き、果粒群が不規則にかたまり、また、左右外側にも短いみぞが縦に走り、その外側にも一の果粒が並ぶ。各腹節側部には長毛を混えた刺毛があり、殊に第9腹節の側部と後部のものは太く長い。第9腹節端には上向きに小さく茶褐色の尾刺が1本ある。第1～8腹節の側板隆起上には、1本の長毛と1～3本の細い毛がある。各腹面の腹節では、第1～第7節歩行隆起上の果粒列は二列の環状で、第3～第6腹節のものは、この果粒列は、正中部が細くつぼまり、左右にやや長円形に広がる。第9腹節端には刺毛が並び、肛門の周囲にも短かい刺毛がとり巻く。肛門3裂。気門は、やや縦長の長円形で、長径比は、中胸気門：第1腹節気門：第2腹節気門＝11：8：7。本種と、他の類似の *Mesosa* や *Pterolophia* などとは下口節上の突起、大腿の形などにより区別できると考えられるが、いずれ *Mesosa* の比較検討をしたいと思っている。

(検体) 使用した幼虫は、1974年、足立一夫氏が対馬より持ち帰ったクロマツ枯枝より分離したものの5個体で、作図したものは、体長11.9mm、前胸幅2.5mm、前胸長1.3mmであった。

(蛹の形態)

蛹の背面において、頭頂左右に2本ずつの刺毛あり、前胸背は前縁近くに沿い、かすかにしぼられ、正中部は縦にかすかに凹む。側面基部はやや外方に突出する。前縁に沿って刺毛を伴った小さいトゲ状突起が左右に横列し、また、同様な突起は中央部にまばらにあり、前胸後半左右に5～8本位生える。中胸小楯板は正中部やや凹み、後半部は渦巻状の条痕あり、その左右にいくらかの棘状突起あり。後胸小楯板は正中溝明らかで、後方左右に1～3本位の比較的大きい棘状突起あり。その斜め上外方にも数本の小さい突起が並ぶ。各腹節上には、刺毛を伴った、やや曲った茶褐色の棘状突起が並び、第1～

第6節では、やや不規則な2列状で、第7節では全面に分布し、後方のものは、時に上方あるいは側方に曲る。第8節の突起は、後縁近くに、ほぼ一列状に横に並び、第9節端には、正中部を除き左右にある。

蛹の腹面において、頭部顔面は、三角形に近く、触角付着部はもっとも幅広く、顔面扁平で、頭頂左右に2本ずつの刺毛あり。顔面の触角付着部の内側に、左右に3刺毛が斜めに並ぶ。顔面平滑で頬に1～3本の小さい刺毛あり、また、頭楯基部の上に対の微毛あり。頭楯部は左右凹み、2本ずつの刺毛あり、上唇の中程から先端にかけてふくれ、中程左右に刺毛列あり、また、先端にも数本の微毛列が並ぶ。上唇上の刺毛は、観察した範囲では♂の方が多く生えている。大腿、小あごひげの上には1～2本の微毛あり、また、各腿節端にも1～2本の細い毛がある。各かぎ爪上には毛はないが、時に微毛が1本位生えている個体もある。上翅先端はやや尖り、内側はややめくれる。触角は体側に沿って下行し、翅の先端近くの、後肢脛節の位置で曲り上行し、各付節に沿って上行し、♂では、前肢脛節端より外側に曲り、前肢腿節端より1/2位の所で止り、♀では前肢脛節端近くで止る。各腹節は殆ど毛なく、第9節端の周囲は刺毛を伴った棘状突起で囲まれる。

(検体)

幼虫同様に、対馬のクロマツより分離した幼虫を飼育し、1975年の5月より6月にかけて蛹化した3個体を使用した。作図に用いたものは、体長7.5mm、前胸幅1.8mmの♀で、他のものは、♂=体長9.6mm、前胸幅2.4mm、♀=体長9.5mm、前胸幅2.5mm。

(生態)

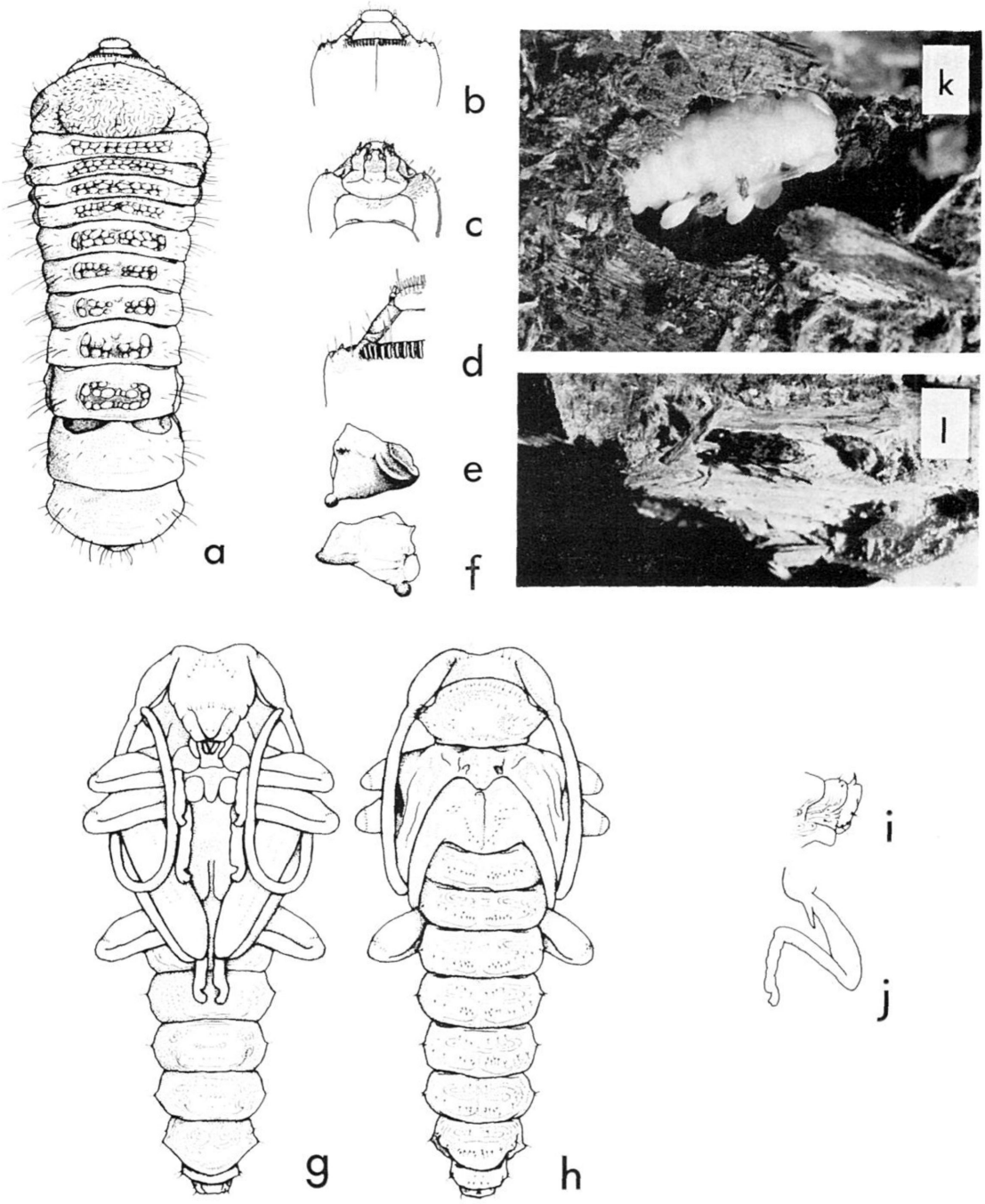
本種の幼虫は、クロマツの比較的新しい枯枝に食入する。検した枝の径は1.5～2.5cm位のものが多かった。樹皮下性で、蛹室は、樹皮下の辺材部を長円形～曲玉状にくぼみをつけて、周囲を木の繊維とFrassで囲み蛹化する。蛹室の大きさは、4例で長径12～14mm、短径5mmの長円形或は曲玉状であった。蛹化は屋内では、早いものは4月末頃より始まり、遅いもので6月初旬。蛹期間は凡そ3週間前後で、羽化後3～4日から10日程蛹室に留まり、ほぼ円形の径4mm前後の脱出孔を樹皮に開孔して脱出する。飼育での最終脱出記録は1975年6月29日であった。その他の生活史は今のところ観察していない。

5. エゾトゲムネカミキリ

Oplosia fennica suvorovi PIC

(幼虫の形態)

頭部—背面において、上唇は横長で長円形淡黄色。額



5. エゾトゲムネカミキリ *Oplosia fennica suvorovi* Ptc

a~f: 幼虫 a. 背面 b. 頭部背面 c. 頭部腹面 d. 前額前縁の刻み目 e. 大腮内面 f. 大腮外面
 g~j: 蛹 g. 腹面(♂) h. 背面(♂) i. 尾刺 j. 後腿節の突起 k. 蛹室中の蛹 l. 蛹室中の成虫